

May-Grünwald 原液染色の有用性

◎青木 義政¹⁾、辛島 貴人¹⁾、藤本 明子¹⁾、樋渡 小夜¹⁾、堀田 多恵子¹⁾
国立大学法人 九州大学病院¹⁾

【はじめに】

May-Grünwald 原液染色 (M 染色) は、小森らにより、好塩基球の確認法 Toluidine blue 染色 (TB 染色) の代替になる旨が報告された (第 20 回日本検査血液学会学術集会、奈良市、2019 年)。志村らの追試では、好塩基球のみならず、好酸球顆粒の鑑別困難例においても M 染色の有用性が示された (第 56 回日臨技首都圏支部・関甲信支部医学検査学会、東京都、2019 年)。

慢性骨髄性白血病 (CML) 症例において、しばしば好塩基球の鑑別困難例に遭遇することがあることから、我々も M 染色の有用性を追試した。さらに、M 染色はさまざまな症例に応用できるかを確認した。

【方法】

M 染色液はシスメックス株式会社製を用い、抹消血液塗抹標本を 30 秒染色し、水洗、乾燥後、鏡顕した。TB 染色液は、CHROMA 社製または MERCK 社製の粉末を自家調整して使用した。

【結果】

M 染色は、好塩基球、好酸球それぞれの顆粒を明瞭に染め分け、容易に細胞を分類することができた。特に CML 症例では低顆粒好塩基球を明確に鑑別することができた。そのほか、一部の症例に認められる低顆粒好酸球の判別にも利用可能であった。さらに Chédiak-Higashi 症候群における巨大顆粒も明確に染色されていた。

【まとめ】

好塩基球の確認のために、わざわざ TB 染色等を行わずとも、通常の血液塗抹標本を作製している施設であれば、特別な試薬、機器等は一切使用することなく M 染色は実施可能であり、M 染色の鏡顕後は、再度普通染色を行うこともできるため、非常に簡便かつ有用な染色法であるといえる。今回示した症例以外にも、さまざまな症例に応用できそうであるため、今後もさらなる有用性の評価を行っていきたい。

連絡先 092-642-5758